

回覧

令和 2 年(2020 年)度 第 五 回 定例役員会 2020 年 5 月 2 日(土)

～2020 年 5 月 1 日(金) 作成～

< 館長報告 >

館長 土井 承夫(どいよしお)

新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し公民館執行部は今年 5 月 2 日(土)開催予定だった定例役員会を中止と致しました。然し、この館長報告と各部長報告及びその他必要書類は回覧により皆様にお届け致します。

先日 4 月 25 日 18 時頃に防災行政無線放送で倉吉市全世帯(約 1 万 5 千世帯)に対して、新型コロナウイルス感染危機の非常事態に際しての石田耕太郎倉吉市長からのメッセージが 1 分 50 秒にわたって放送されましたが、これがほとんど何を仰っているのか分からない粗悪な録音状態のもので、直ぐに福庭住民の何人かから私に問い合わせがありました。私は直ちに市役所関係者の方々に詳細をお聞きし素早い対応をお願いしました。

これを担当された総務部企画課課長 内川 啓二 様と原因と対策について 1 時間以上お話し合いをさせて頂きましたが、結果としては 4 月 28 日(火) 18 時 20 分に同無線放送でまず内川課長の丁寧なお詫びの口上のあと石田市長の普段通りの明瞭に聞き取れるオリジナル録音のスピーチが粛々(しゅくしゅく)と放送されました。内容からしてゴールデンウィーク前に間に合って本当に良かったと思います。

今回の不具合は、実は非常に難しい組織面と技術面の問題が絡んでいます。何が問題だったかというと、市長のメッセージを市役所の担当である総務部企画課が録音したのですが、その段階では明瞭な通常の録音状態だったのに、そのデータを外注である防災無線サポートセンター(外部組織)に託してそこが行う最終のアウトプット(最終的に住民に聴こえる放送内容)を本体の総務部企画課がチェックしていなかったという事であります。今回のコロナ非常事態における市長メッセージ放送は中部地震以来 4 年ぶりの事であり普段の放送とは異なり入念な最終チェックが不可欠でありました。そして、最後に元データを加工して放送するのが上記の「外注」という本体の組織の管理・命令系統が届きにくい別会社であったという事も問題でした。

ならば、外注を使わずに市役所本体が最後まで責任を持てばいいではないかという議論になりますが、コスト面や行政としての中小零細企業の育成の観点などから簡単にはそうはなりません。ただし、「外注」とは基本的には別組織であり事前に連携の詳細を詰めておかないと市役所本体の意向とは別の結果を生み出します。大きなメーカーや飲食産業などの企業にはわざわざ「外注管理部」を設けて、部長や課長を配して運営しているところさえあります。ただ、今の倉吉市役所殿が使っておられる外注の数からするとそこまでする必要はないと私は考えます。

要は、数年に一回あるかないかの今回の様な緊急事態放送については、本体の責任者や関係者が実際にその外注に出向いて最終チェックを行う事が肝要と考えます～まあ、失敗を教訓にして次から直していけば良いことで、今回の素早い対応については、大変良かったのではないかと思います。

それでは、まだお聞きになっていない方のために、28日（火）18時20分に再度放送された「新型コロナウイルス感染症についての市長メッセージ」を内川啓二総務部企画課長のお詫びの言葉と共にそのまま掲載致します。

<内川啓二 総務部企画課長のお詫びの言葉>

こちらは倉吉市です。4月25日（土）の夕刻に放送いたしました市長からのメッセージにお聴き苦しい点がございました。お詫び致しますと共に、あらためまして市長よりメッセージをお届け致します。

<石田耕太郎 倉吉市長のメッセージ>

倉吉市長の石田です。市民の皆様にはコロナウイルス対策につきまして日頃からご協力を頂き心より感謝申し上げます。全国的に感染が広がるなかで、これ以上の感染拡大を防止できるかどうか正念場を迎えています。

このため、市民の皆様には是非次の二点の取り組みをお願いしたいと思います。一つは手洗いや咳エチケット、人との接触を避けるなどの感染予防策を徹底していただくこと、そしてもう一つは不要不急の外出は自粛して頂くことです。特にこれからゴールデンウィークが始まります。人の往来が増えると感染が拡大する要因となります。今年だけは可能な限り外出や帰省も辛抱していただきたいと思います。

ご不便をおかけすることになりますが、ご理解の上、ご協力いただきますようお願い致します。一人一人が自覚して行動することで、きっとこの困難な事態も乗り越えることができると信じています。 みんなで頑張りましょう。

令和2年4月25日 倉吉市新型コロナウイルス感染症対策本部長

倉吉市長 石田耕太郎

<館長のひとこと>

どんな仕事にもミスや失敗はあります。大事なのは、それに迅速に誠意をもって対応することです。そうすれば相手との絆（きずな）はむしろ深まる事が多く次の展開への貴重な蓄積となります。私は営業の仕事が長かったのですが、「クレームの時こそお客様と仲良くなれるチャンスであり、それが次の注文につながる」と何度も教えられ実際そういう体験も致しました。

<福庭自治公民館新築特別寄附金（自主的な寄附）の集計状況>

住民の皆様からの上記の自主的な寄附金の集計状況をこの後もこの館長報告でお伝えしていきます。ご寄附は新公民館が完成する本年 2020 年 11 月 30 日まで受け付けます。受け付け窓口は館長の私、土井承夫です。**(26-0770、携帯 080-4261-1979)** お電話を下されば、ご持参いただかなくとも私が戴きに参ります。

***令和 2 年(2020 年) 4 月 30 日（木）現在の集計結果(総計)は次の通りです。**

(1) 寄付頂いた世帯数： 140 世帯（全体の約 34 %）

(2) 寄附金の合計： 455 万円

(3) 個々の寄付金額の概要：最高額：30 万円（1 名）30 万円（福庭青年団）
25 万円（2 名：1 名は福庭、もう 1 名は福庭以外の方です）10 万円（13 名）
5 万円（10 名）、3 万円（20 名）、2 万円（12 名）、1 万円（80 名）他

以上

<館長の行動日誌>（4 月、5 月分）

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、公民館の通常の行事は今回の定例役員会も含めて 4 月、5 月は基本的にすべて中止にさせて頂いております。皆様のご理解をお願い申し上げます。従ってこのコーナーも暫く記述致しませんが、前回の館長報告（4/16 付・2 ページの 21～24 行目）で英国のエリザベス女王陛下がコロナ危機に関してテレビ演説された中に、「自主隔離は時に辛い事もありますが、あらゆる人が急ぐのをやめ、ゆっくり落ち着いて、祈りや瞑想（めいそう）で自省する良い機会だと大勢が気づいています」というくだりがあり、私自身もじっと家に居て自分を顧（かえり）みるよい機会だと心得てそうしていますが、顧みる事の何と多い事か・・・ただただ、反省の日々であります。

新シリーズ「心に残った一曲」(第6弾) ニューミュージックより

～さだまさし作詩・作曲・歌唱～

案山子 (かかし)

元気であるか 街には慣れたか 友達できたか
寂しかないか お金はあるか 今度いつ帰る
城跡から見下ろせば 蒼 (あお) く細い河
橋のたもとに 造り酒屋のレンガ煙突
この町を綿菓子に 染め抜いた雪が消えれば
お前がここを出てから 初めての春

手紙が無理なら電話でもいい 「金頼む」の一言でもいい
お前の笑顔を待ちわびる おふくろに聴かせてやってくれ

元気であるか 街には慣れたか 友達できたか
寂しかないか お金はあるか 今度いつ帰る

山の麓 (ふもと) 煙はいて 列車が走る
凧 (こがらし) が雑木林を 転げ落ちて来る
銀色の毛布つけた田圃 (たんぼ) にぼつり
置き去られて 雪をかぶった 案山子 (かかし) がひとり
お前も都会の雪景色の中で 丁度あの案山子の様に
寂しい思いしていないか 体をこわしてはいないか

手紙が無理なら電話でもいい 「金頼む」の一言でもいい
お前の笑顔を待ちわびる おふくろに聴かせてやってくれ

元気であるか 街には慣れたか 友達できたか
寂しかないか お金はあるか 今度いつ帰る

寂しかないか お金はあるか 今度いつ帰る

～おわり～

<歌の背景と感想>

都会で一人暮らしをする弟（あるいは妹）を雪の中にぽつんと立つ案山子（かかし）になぞらえ、故郷にいる兄が気遣うメッセージを送る歌である。今の卒業、進学、就職のシーズンに、親兄弟や子どもそれぞれが思い当たる心情を爽（さわ）やかにそして少しほろ苦く謳（うた）いあげた さだまさし の名曲である。

この春、子供や兄弟を進学や就職で都会に送り出された方々も多くいらっしゃる事だろう。駅のホームで、空港のロビーで、家の玄関で、息子や娘を一人で送り出す親の心情は今も昔もこの曲の歌詞に出てくるとおりだろう。

私自身も 45 年以上前に倉吉駅のホームで大きな荷物を抱えながら、父や母の見送りを受け、期待と不安のなかで初めて行く東京に向かった。発車のベルが鳴っても何度も何度も手を握る母、それをにこにこしながら後ろで見ていた父の姿・・・今も目に焼きついている。そして何十年か後に今度は自分の息子を送り出すことになり、あらためてこの曲の歌詞を親の立場から噛みしめる事になる・・・「体をこわしてはいないか」「お金はあるか」「『金頼む』の一言でいい」～学生時代、親からの仕送りだけが頼りだった私自身の経験からも、これらの歌詞は身に染みてよくわかる。それだけでなく親は生涯、自分の子どもに対してはずっとこの様な気持ちなのだろうという気もする。

さだまさし さんがこの曲を書いたのは、昭和 52 年(1977 年)の 11 月の事だ。大分から福岡へ弟と共に移動する際に、列車から見た景色だという。その日は雪が降っており、車窓から雪の中に案山子がポツンと立っているのを見たさださんは、「かわいそうにな、雪の中に立ってて」と話しかけたという。弟は鈍い反応しかしなかったが、さださんはその風景と自身が経験した都会での一人暮らし、そして弟の台湾留学の思い出などが重なり、この曲を思いついたという。私は若いころ、最初の赴任地が北九州市だったので当時の福岡や大分の風景は何となく覚えている。当時の倉吉にも負けない「ド田舎」で子どもや兄弟を都会に送り出す心情は倉吉や福庭の人たちと一緒に思う。その さだまさしさんは昭和 27 年生まれの現在 68 歳、本名は「佐田雅志」で芸名と同じ。数々のヒットメーカーではあるが、昭和 56 年に中国大陸を流れる大河を舞台にしたドキュメント映画「長江」（主題歌は「生々流転」）の制作費をかけ過ぎたため映画自体はヒットしたものの結果として 30 億円の負債をかかえる事になる。その借金をその後 40 年近く年 200 回以上のコンサートを開いて稼ぎまくり全額を最近返済した。だからコンサートの通算回数は現在まで 4,000 回以上で日本人最多となっている。ただものではない。以上